

平成 23 年度 第 3 回海域の物質循環健全化計画統括検討委員会における主な指摘と対応

委員名	指摘内容	対応内容
ヘルシープラン策定の手引き(案)について		
鈴木委員、藤原委員、中田(英)委員	<p>(ヘルシープランの考え方)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「～はじめに～」の環境基準とヘルシープランの関係は「海域ヘルシープランでは、水質総量削減等の各種取り組みを検証するとともに、問題があれば見直しを含めて更にステップアップする」と言う主旨にして欲しい ・高次生態系のエネルギー転換の効率（生産性）をあげる方向に、ベクトルを変えるべき ・生産性ととともに多様性ともバランスをとることができるとような栄養管理を目指すべき ・栄養塩を減らせば、一次生産がおさえられるという、ボトムアップ的な発想から、トップダウン的な発想（上位の栄養段階を多様にする）の転換が必要 	<ul style="list-style-type: none"> ・「～はじめに～」にてご指摘を踏まえ修正・追記しました
中田(英)委員	<p>(ヘルシーの考え方)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「I. 海域の”ヘルシー”の考え方」は「食料生産の持続性」が重要なキーである。持続させるためには「再生産可能な生物資源を生み出す海の仕組みが重要」であり、栄養塩管理をしっかり行う必要があるということが基本になると考える 	<ul style="list-style-type: none"> ・「I. 沿岸の海域における“ヘルシー”とは」にてご指摘を踏まえ修正しました
寺島委員	<ul style="list-style-type: none"> ・「3. 沿岸の海域への人為的負荷（インパクト）」では、マイナス面だけではなくプラス面も表現して欲しい 	<ul style="list-style-type: none"> ・「3. 沿岸の海域への人為的影響」とし、ご指摘を踏まえ修正しました
鈴木委員	<ul style="list-style-type: none"> ・「4. 沿岸の海域における”ヘルシー”とは」で「沿岸域の利用者の立場によってどの様な海が”ヘルシー”であるかは異なってくる」と言う表現は間違いであり、「再生産可能な生物資源を生み出す海の仕組みが健全であること」がヘルシーであるという趣旨で修正すべき。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「4. 沿岸の海域における”ヘルシー”とは」にてご指摘を踏まえ修正しました
山本委員	<p>(方策の評価)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「5-2 方策の効果の評価」では、モデルの限界を踏まえておく必要があることが必要である 	<ul style="list-style-type: none"> ・「5-2 方策の効果の評価」にてご指摘を踏まえ修正しました
鈴木委員	<p>(海域の健全化指標について)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・栄養塩の濃度だけではなく、割合を追加すべき ・「植物プランクトンから動物プランクトンへの転換量」のところで、「転換量」というのはあいまい。chl.a とフェオ色素（フェオフィチン）の比率も考えられる ・藻場・干潟に「浅場」も加えるべき 	<ul style="list-style-type: none"> ・「5-5 健全化に向けた方策に対する目標の設定」にてご指摘を踏まえ追加しました

山本委員、松田座長	(指標のストックとフローの観点) <ul style="list-style-type: none"> ・ストックとフローという観点ではほとんどがストックとなっており、フローに着目した項目を入れてはどうか ・ストックとフローの観点で指標がわかるように表現を工夫して欲しい 	・「5-5 健全化に向けた方策に対する目標の設定」の関連図にてご指摘を踏まえ追加しました
藤原委員、松田座長、中田(喜)委員、鈴木委員	(代替指標の考え) <ul style="list-style-type: none"> ・フローについては、モデルを用いないとわからない。代替指標も考えると良い。例えば、植プラから動プラへの転換量はそれぞれのバイオマス量が測定されており、この比を取ることも考えられる。 ・データのとりやすさ、わかりやすさということから、より簡便な方法としてストックを用いることは仕方がない。ただし、バイオマス量等の量を指標とすると、環境基準と変わらなくなる懸念がある。 	・「5-5 健全化に向けた方策に対する目標の設定」の「各指標のデータの入手の容易性」にてご指摘を踏まえ修正しました
鈴木委員、松田座長、中田(英)委員	(タイプ別の指標の考え方の例) <ul style="list-style-type: none"> ・生物が利用する視点について、負荷だけでなくプランクトン食の魚類の漁獲量などを追加してはどうか ・湾の生態系のバランスが崩れたときに、一番変化が起きる事をみていく例（東京湾のイシガレイの減少など、指標生物のようなもの）を入れたほうが良い。 	・「5-5 健全化に向けた方策に対する目標の設定」の「着目すべき問題と指標の考え方の例」にてご指摘を踏まえ修正しました
中田(英)委員	・ロードマップではどこにプランの目標をおくかという時間軸の設定の考え方をはっきりしておくべき。	・「5-6 方 策実施のロードマップの作成」にてご指摘を踏まえ修正しました
鈴木委員	・モニタリング計画については、指標と関係してくるので、具体的に詰める必要がある。	・地域WGの例も参考として、検討を行います。

物質収支モデルでの実証試験の効果検討結果について

委員名	指摘内容	対応内容
山本委員、西村委員	<ul style="list-style-type: none"> ・モデルの計算結果の評価は判断を見誤らないようにする必要がある（例えば、ストックだけみたのでは貝の捕食により、プランクトンが減ったのか、他の要因で減ったのか分からない）。 ・現地調査だけでは限界があるため、生態系モデルを最大限活用して物質循環がどうなっているのかを示してほしい（例えば、浅場を造成がどの程度、物質循環に働くのかなど）。 ・「管理方策の効果のモデルによる検証」というのは大事なところである。不健全な事象に対して対策を実施し、そのレスポンスが明確にわかるように示してほしい。 	・資料-2 に計算結果の解釈及び物質循環のストックとフローについて整理しました。